

独歩第八五大隊森田大隊長所蔵書類一式

とっておき埋文講座② 新資料紹介

富山県埋蔵文化財センター所長 河西 健二

この資料は、旧日本陸軍独立歩兵第八五大隊の終戦時大隊長であった旧福野町出身の森田豊太郎氏が所蔵していた書類である。令和3年2月に南砺市福野文化創造センターヘリオスで行った私の文化財講演をお聞きになられた、ご子息の森田嘉樹氏から保管の相談を受け、当センターにお譲りいただいたという経緯である。

所蔵書類は冊子類、一紙類、印刷物などおよそ131点で、軍用行李にぎっしりと収納されていた。軍用行李は木地の上に布と皮を張ったもので、内側に「櫻組」とスタンプが押してある。桜組は後のニッピ(日本皮革株式会社)、靴部門はリーガル靴となる革製品の企業で、桜組の名称は明治17年から40年頃に呼称していたと考えられることから、その時期の製品と思われる、森田氏が私品を入れるために携行していたものであろう。

さて、書類の中に森田豊太郎氏の経歴を示すものがあるので、そこから氏の経歴を追ってみたい。

森田氏は明治41年の生まれで、旧制中学を卒業後郵便局に勤められ、昭和4年に陸軍に徴兵入隊している。20歳の時である。通常は2年で除隊し予

備役となるのだが、氏は昭和14年に陸軍予科士官学校に入校している。陸軍のエリート士官となる予科士官学校には、一般学校を卒業して試験入学する士官候補者と、軍の下士官から選抜され入学する少尉候補者、徴兵後選抜され甲種幹部候補生になったうえで志願して入学する特別志願者があるが、氏は少尉候補者である「少20期」出身と記されている。つまり、昭和4年の徴兵後、除隊することなく現役兵として勤め上げ下士官となり、30歳の時に入学したと思われる。翌昭和15年9月に予科士官学校を卒業し、そのまま独立歩兵第八五大隊付き見習士官として、中国山西省に派遣される。同年12月に少尉に任ぜられ、翌昭和16年12月に中尉に昇進、昭和17年6月大隊副官に。いったん上部組織である歩兵第六九師団参謀部に転任し、昭和19年12月に大尉に昇進。昭和20年5月に八五大隊に戻り、同年7月に大隊長となり終戦を迎えている。

この森田氏の経歴で注目すべきは昇任の速さで、通常なら平時は少尉になってから中尉になるのに3年、大尉になるのにまた6年ほどかかるが、氏はそれぞれ1年、2年の規定上最速で昇進しており異例のスピードである。

この背景として考えられるのは、中国戦線拡大による士官不足と氏の経歴にある。中国戦線の範囲拡大により、陸軍は占領地守備のための独立歩兵大隊を乱立せざるを得なかったが、各大隊の指揮をとる実戦経験のある士官が、あまりにも不足していた。大隊長は通常、少佐クラスが就くが、この八五大隊の最初の大隊長は大佐であった。続く後任も中佐で、彼らは推測40歳以上の再召集予備役であった。最前線の部隊の指揮官は士官学校出のバリバリの若い現役兵が就くが、守備用の独歩大隊には、こうしたロートル予備役が回されていた経緯がある。しかし、これにも限りがあるため、陸軍は応急で大隊長クラスの指揮官を養成する必要があったようで、ほとんどが予備役少尉の中で数少ない現役兵少尉で、年齢的にも年上で、下士官として軍経験の長い森田氏に白羽の矢が立ったと思われる。やはり兵にとっては人望の厚さと経験値が大事なのであろう。この時、森田氏は37歳。終戦時の八五大隊の大尉級の平均年齢が31歳。中尉級33歳、少尉級25歳、准尉30歳、曹長28歳、兵は20歳から37歳程度なので、氏がお兄さん役として適任であったことが窺われる。ちなみに、独立歩兵大隊だが、戦後の映画で「独立愚連隊」と揶揄されることがあるように、前線で手を焼いた不良兵士たちが独立守備隊に回されやすいことから制作されたようだが、八五大隊の人員に関してはそのような印象はあまりみられない。



左：森田氏寄贈の軍用行李

上：内側に押された「櫻組」のスタンプ



独立歩兵第八五大隊は、中国戦線の拡大に伴い、昭和14年11月に新設されたもので、定員1,124名で山形連隊区で編成され、その大部分が山形県出身者である。終戦時の富山県出身者は大隊長の森田氏のほか准尉、曹長が1名ずつの3名で、いわゆる指揮官クラスの人員は山形県以外から引っ張ってきているのがわかる。八五大隊は当初、独立混成第十六旅団の麾下にあったが、昭和17年に歩兵第六九師団の麾下に編成され、通称「勝四二一五部隊」と呼ばれた。主に山西省各地の守備任務につき、八路軍や共産軍のゲリラ戦討伐に出ている。数度にわたり大きな犠牲者を出している。また、大きな作戦としては昭和19年4月から7月にかけて、西北河南作戦（大陸打通作戦）にも参加し、敵前での黄河の渡河作戦で大きな損害を出している。終戦時には河南省で守備任務についており、復員は昭和21年1月13日に主力1,053名が上海を出発、同16日に佐世保港に上陸除隊した。森田大隊長以

下12名は、1月28日に上海を出発し、同31日に博多港上陸、森田大隊長以下2名を残し除隊。森田大隊長はしばらく博多で残務にあたったようである。

昭和20年8月15日の終戦後、昭和20年9月9日に所属する第一軍参謀本部が、支那派遣軍復員規定を作成して麾下に配布している。それ以降、森田大隊長以下は復員に向けての作業にとりかかったようで、本資料131点の大部分は、その作業で使用された書類もしくは作成された書類のようである。最終的に博多での残務整理後に復員省に提出したと思われる書類一覧表メモによると、『除隊召集解除者連名簿、将校予備役編入後ノ住所届、現役将校本籍地及帰郷予定地一覧表、留守名簿、死亡者連名簿（留守名簿記載分）、残留者名簿（残務整理者ノ部）、残留者名簿（其ノ他残留者ノ部）、生死不明者連名簿、処刑者連名簿、入院患者連名簿、入院患者名簿及病床日誌綴、入院患者功

績名簿、死亡者二関スル一切ノ書類、乗船者連名簿、戦時名簿、転属者連名簿、部隊略史、生死不明者関係綴』とある。総員1,000名を超える部隊でこれだけの書類を整えるのは、なかなか大変なことであるし、何よりも軍隊は戦死病者や転属などの出入りも多く、森田氏は大隊長就任後、こうした事務に忙殺されていた様子が窺われる。

分類	数量	主なタイトル
復員	15	部隊略歴、乗船者連名簿、除隊召集解除者連名簿、残留者名簿
病院	7	死亡調書、入院患者名簿、病床日誌綴、現認事実証明書綴
人事	75	留守名簿、転属者連名簿、死亡者連名簿、遺骨遺留品名簿
叙勲	34	死没兵功績別次名簿、生存者恩典関係綴、恩典関係受給資格者連名簿
計	131	

131点の資料を大きく分類すると、上記のように復員関係、病院関係、人事関係、叙勲関係に分けることができる。

復員関係資料は復員作業のために作成した書類で、除隊召集解除者連名簿は復員者全員分が記載された名簿である。復員と同時に、現役兵は除隊に、予備役は召集解除となる。ちなみに、復員兵は樺太出身の1名を除き、全て日本本土の出身者となっている。不思議に思い調べてみると、どうやら1月の復員前に、満州や朝鮮半島出身者はあらかじめ師団司令部に転属させたようで、結果、日本に帰国する兵のみの構



成となったようだ。また、残留者とは中国軍の馬管理のために馬管理に長けた兵や獣医が選抜されて残されている。その後いつ帰国したかは不明。

病院関係資料は、死亡者や入院患者の履歴のバック資料となるものである。主に部隊医務室、軍医が管理していた台帳及び死亡、入院の事実証明書である。一人ひとりの入院にあたり、指揮官(主に中隊長)と軍医の所見が入念に手書きで書かれており、指揮官が戦闘だけでなくこうした事務を行わなければならない多忙さが窺われる。

人事資料は一番点数が多いもので、人事管理台帳となる留守名簿や、留守名簿を改訂していくための出入り書類となる。留守名簿は各出身の連隊^{みせん}区別となっており、全て手描きなので、付箋を貼ったり見え消し線を引いたりなどの修正が見られる。また、遺骨遺留品名簿は、戦死者の遺族に対して送付する遺品の管理をしている書類で、戦病死兵に対して漏れないよう丁寧に管理している様子が見える。変わったところでは、生死不明者連名簿などで、生死不明とは戦闘中に敵軍に捕えられたり、逃亡したりしたものだが、軍と

しては戦闘時なのか逃亡なのかで昇進にも恩給にも関わってくるため、真相を追及するなど、その対応で苦慮している様子が窺える。

叙勲関係は、唯一復員とは直接関係のないものだが、兵の功績を証明し恩典を上申するのは大隊長の重要な仕事であった。死没兵の遺族や生存兵にとっては、その後の恩給に関わる重要な案件だけに、大隊長としても最後まで書類作成に尽力したようである。残っているのは上申の下書きや功績の写しがほとんどである。

以上のように、森田大隊長が軍用行李に入れて保管していた131点の書類は、復員時に大隊指揮官として復員省に提出する正式書類を作成するための基礎資料及び写しであると判断できる。提出された書類は、現在は厚生労働省が保管していると思われるほか、山形県に八五大隊の戦友会があることから、そこでも留守名簿などの名簿類は保管もしくは写しを持っていると思われる。しかし、戦後75年以上を経過し、資料の散逸や亡失の可能性は高まっている。当センターでは、発掘調査品ではないが歴史を物語る資料

として、軍用行李とともに、戦争の記憶や大隊指揮官の復員時の労苦を偲ぶ歴史資料として後世につなげていきたいと考えている。

最後に、快く資料提供をいただいた森田嘉樹氏に、深く感謝申し上げる。

参考資料

- ・「知られざる兵团 帝国陸軍独立混成旅団史」藤井非三四(国書刊行会) 2020
- ・「軍用行李類の制式について」宮内愼(デザイン学研究N62) 1987
- ・「日本皮革(株)『日本皮革株式会社五十年史』(1958)」渋沢社史データベースHP
- ・平和展示資料館HP(労苦体験手記 軍人軍属短期在職者が語り継ぐ労苦〔兵士編〕)より
「北支から中支へ勝部隊 独歩第八十五大隊の戦闘」小山田庄三郎
「勝兵团・我が戦陣の記」須藤幸一
「勝部隊 河南作戦で負傷」湯上弘
「運命に従い 内地―蒙古間二回の戦務」大沼祐三郎

